

IAU 京都総会大筋決まる

—第 23 回国際天文学連合総会の開催について—

世界の天文学者が一堂に会するという一大イベントが、1997年8月京都であります。これは、国際天文学連合総会と呼ばれるもので、学術会議及び天文学会主催ということでもあり、天文学会会員の多くの皆様に関心をもって参加・協力してもらうべく、月報の紙上をお借りして今後定期的に準備状況、関連事項を報告していく予定です。

1. 総会の概要

総会の開催要領は次のようです。

正式名称：第 23 回国際天文学連合総会

(略称：IAU 京都総会, IAU-97)

開催場所：国立京都国際会館

(京都市左京区宝ヶ池)

開催期間：平成 9 年 (1997 年) 8 月 17 日 (日)

より 8 月 30 日 (土) までの 14 日間

主 催：日本学術会議,

(社) 日本天文学会

後 援：(社) 日本物理学会,

日本惑星科学会,

文部省 (予定), 科学技術庁 (希望)

総会 (General Assembly) は、天文学に関する国際学術団体である国際天文学連合 (International Astronomical Union, 略称 IAU) が 3 年毎に開催しているもので、天文学のすべての分野にわたる研究発表及び討論等を行うとともに、天文学における国際協同及び基準の設定と国際学術団体としての運営上の問題を並行して審議することになっています。

また、今回の総会では、前回のハーグ総会同様、多くの人に総会に出席してもらおうということで、総会前後に合計 6 つの IAU シンポジウムを合わせて開催することになっています (杉本大一郎、

天文月報, 1995 年 1 月号 42 頁参照)。14 日間の長丁場になっているのはこのためです。さらに、アジア開催の機会は少ないということで、合わせて近隣国でのシンポジウム開催も計画されています (今のところ中国開催が有力)。シンポジウムのテーマは今年の 6 月中に決定される予定です。

2. 日本開催にいたる経緯

最近の総会開催状況は次の表に示す通りです。

回	年	開催地 (国)	参加国数	参加者数 (日本人数)
1	1922	ローマ (イタリア)	19	83 (1)
..... 中 略				
18	1982	バトラス (ギリシャ)	約 40	約 170 (約 30)
19	1985	デリー (インド)	約 40	約 1400 (約 20)
20	1988	ボルモア(米国)	57	1700 (51)
21	1991	ブエノスアイレス (アルゼンチン)	47	1024 (29)
22	1994	ハーグ (オランダ)	66	1640 (55)

さて、国立天文台野辺山電波観測所を中心とする電波天文学、宇宙科学研究所を中心とする X 線天文学、諸大学における理論天文学の発展、ハワイにおける大型光学赤外線望遠鏡の建設など、日本における天文学研究は、近年富みに高まっています。このような背景から、日本で総会を開催してほしいという要望が強くなっていました。そこで、日本天文学会と学術会議天文学研究連絡委員会は、1997 年に日本で総会を開催するべきであると判断し、1991 年アルゼンチンでの第 21 回総会でのロビー交渉などを経て、1992 年 5 月に仮の招待 (予定) 状を IAU 執行委員会 (IAU Executive Committee) に送りました。IAU はそれを受け、1993 年 4 月に IAU 事務総長が来日して会場等を視察し、同年 6 月の執行委員会において、第 23

回総会を京都市で開催して欲しいと依頼することが決められました。正式決定は、第22回ハーグ総会で1994年8月24日に行われました。

ところで、IAUに登録されている会員は、1994年現在約7900名ですが、そのうち日本の会員は380名です。日本の場合会員資格は、学位取得後3年以上研究を継続していれば得られ、総会の際に推薦されることで会員になれます。但し、総会等の出席には会員・非会員の区別はありません。IAUの役員として日本からは、古在由秀氏(当時、国立天文台長)がIAU会長(1988-91年度)を勤めたことがあり、2名が副会長、20名が常置委員会(Commissions)委員長を勤めています。

なお、日本での総会開催は、IAU創立以来今回が初めてで、アジアにおいても、1985年のインド・デリー総会に次いで2回目となり、アジア諸国からも期待をもって見守られています。

天文学会々員の皆様へ 募金協力をお願い

本文で紹介しましたとおり、第23回国際天文学連合総会(IAU京都総会)の開催が1年数ヶ月後に迫っています。アジアでの総会は今回でまだ2回目です。この機会を活かし、近隣のアジア地域をはじめとして、多くの天文学研究者に参加してもらいたいと思います。そのためには旅費・滞在費の補助も必要です。主催機関から得られる経費は限られていますので、広く募金をする準備を進めています。広く賛同を得るためには、先ず主催側である天文学関係者が拠金するという自助努力から始めなければなりません。つきましては、先ずは天文学会々員のなかで、拠金を集めたいと考えています。詳しくは次号に案内しますので、この主旨にご賛同、ご協力いただきたく、よろしくお願ひします。

3. 開催に向けての国内体制など

京都開催決定以降、杉本大一郎、福島登志夫両名らが中心となって、開催実現に向けて精力的に活動を行ってきていますが、現在決まっている国内組織は以下の表のようになっています。今回の総会は通常の国際研究会とは異なり、予算規模が膨大なため、この組織以外に現在、募金委員会を立ち上げようとしているところです。今後も適宜準備状況等について報告してまいります。もし、質問、お気づきの点があれば、最寄りの委員にどしどしご連絡下さい。

★国内委員会(NOC)委員

委員長:杉本大一郎(東大教養)

委員:竹内 峯(東北大理)、内田 豊(理科大)、尾崎洋二(東大理)、佐藤勝彦(東大理)、小平桂一(国立天文台)、海部宣男(国立天文台)、楨野文命(宇宙研)、石黒正人(国立天文台)、松本敏雄(名大理)、佐藤文隆(京大理)、池内 了(阪大理)

★実行委員会(LOC)委員

委員長:福島登志夫(国立天文台)

会計:有本信雄(東大理)

総務部会:末松芳法(国立天文台)、稲谷順司(国立天文台)、井上 一(宇宙研)、岡村定矩(東大理)

財務部会:小杉健郎(国立天文台)

渉外部会:杉本大一郎(NOC兼任)、尾崎洋二(NOC兼任)

会場部会:稲垣省五(京大理)

(展示)国枝秀世(名大理)

ポスターセッション部会:常深 博(阪大理)

広報部会:谷口義明(東北大理)、長谷川哲夫(東大理)、渡部潤一(国立天文台)、寿岳 潤(東海大)

プログラム部会:野本憲一(東大理)

登録部会:小笠原隆亮(国立天文台)

行事部会:定金晃三(大阪教育大)

無任所:古在由秀(顧問兼任)

★顧問

藤田良雄(日本学士院長)、林 忠四郎(京都大学名誉教授)、小田 稔((財)国際高等研究所長)、小尾信彌(放送大学長)、古在由秀(国立天文台名誉教授)、田中靖郎(宇宙科学研究所名誉教授)

LOC 総務部・末松芳法(国立天文台)